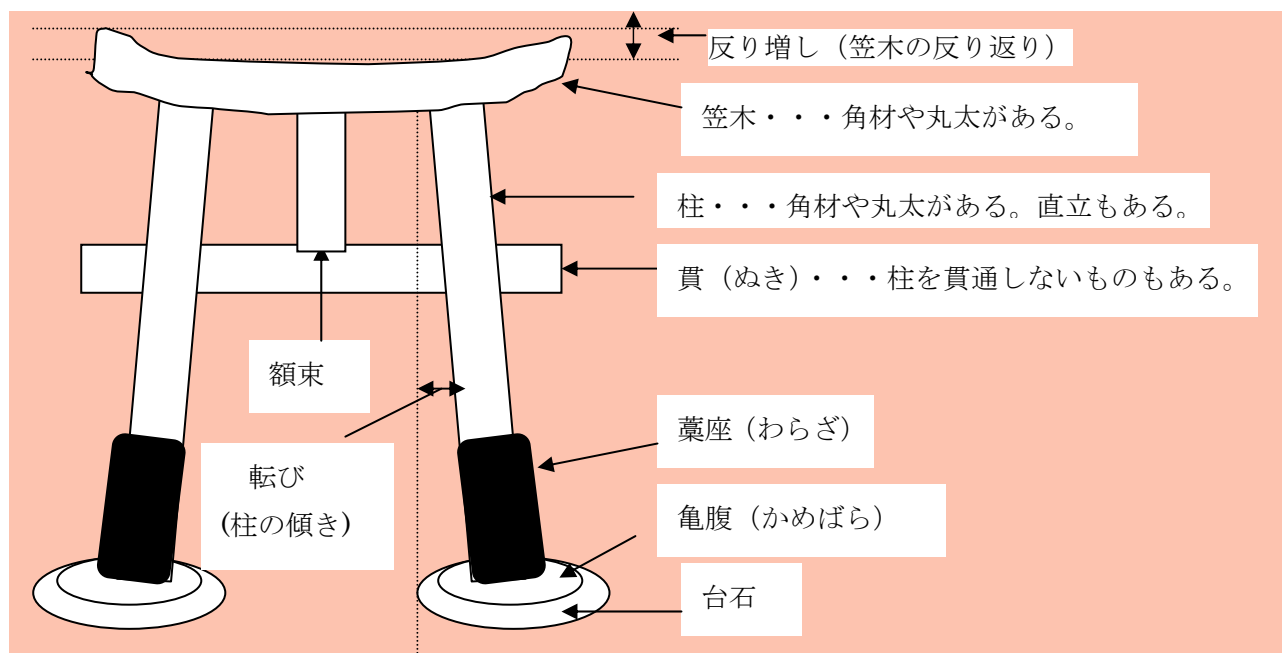


年の始めに、あらためて鳥居をしげしげと眺めておりました。下図に示したのは略例ですが、柱が角材のものもあれば丸いものもあり、笠木が反っているものもあれば、そうでないものもある。似たような形としか思えなかった鳥居ですが、想像以上に種類は多いようです。

『神社の見方』（小学館：サライ編集部編）という本によれば、「反り増し」があるかないか、即ち、笠木が真っ直ぐか反っているかで、最初の区分がされています。笠木の真っ直ぐなものを「神明鳥居系」で、下図のように反っているのが「明神鳥居系」と呼ばれます。因みに、八坂神社の南門の鳥居は図と似た明神鳥居系であり、柱にも転びが見られます。ただし、藁座や亀腹、台石などは有りません。また同本によれば、伊勢神宮や春日神社、さらに靖国神社などは反り増しの無い神明鳥居系のようです。皆さんも機会があればチェックしてみてください。

このように笠木以外の違い、例えば、柱の「転び」があるかどうかとか、「額束」の有無とかで次々と分類され、代表的なものでも20～30種くらいにはなるそうです。

さて、そこで気になったのが、**何故に「鳥居」という名で呼ばれているのか**、ということです。「鳥が居る」と書きますけれども、やはり鳥に関係があるのでしょうか？ 鳥が止まるには都合の良さそうな構造物ではありますが、あらためて考えますと不思議な名称ではあります。



柱信仰

ある特定の場所に縄を巡らして囲い、標^{しめ}の縄を張り、神の降り立つ場所とし、その真ん中に柱を立てる。すると、囲われた土地は「結界」として侵すことのできない聖なる場所となりますが、どうやらこれが神社の始まりだと言われています。神の占有地であるということですね。

柱に神が依り付くという考え方は、中国・モンゴル・朝鮮半島をはじめ、東南アジア域に広く見られます。日本においては、諏訪大社の「御柱祭^{おんぼしら}」が象徴的なものではないでしょうか。

7年目ごとに建替えが行われる時の祭のハイライトは、大勢の氏子を乗せた巨大な木材が山の急斜面を滑り落ちる「木落とし」のシーンです。勇壮ながらも、あれほど危険極まりない行為は、やはり神に一步でも近づこうとする信仰無くしては語れないものかと。さらに青森県の三内丸山遺跡の巨木建造物、あれは決して火の見櫓ではなく、祭祀的な目的であったと思います。

じゅうじつ
十日神話

古代中国には、太陽は10個あって、毎日代わる代わる現れるという神話があります。太陽は神聖な柱(=神樹)の幹を伝って天空に飛び立つと考えられていました。その太陽は鳥に乗って空を飛ぶとされており、ある時に10個が一度に登場したので、地表は灼熱の焦土と化しました。この時、弓の上手な英雄が9個の太陽を射落としたので、無事解決したとのこと。ともあれ、鳥と太陽と神が深い関係にあることがわかります。

『三国志』魏史韓伝 の一文より

毎年5月には種を播き終わり、鬼神を祀る。人々は群がり集まって歌舞し、飲食する。(中略) 10月に農耕が終われば、また再び同じようにする。(中略) 諸国にはそれぞれ特別な地域がありソツテと呼ばれる。そこでは大木を立てて、その木に鈴や鼓をかけて、鬼神に仕えている。

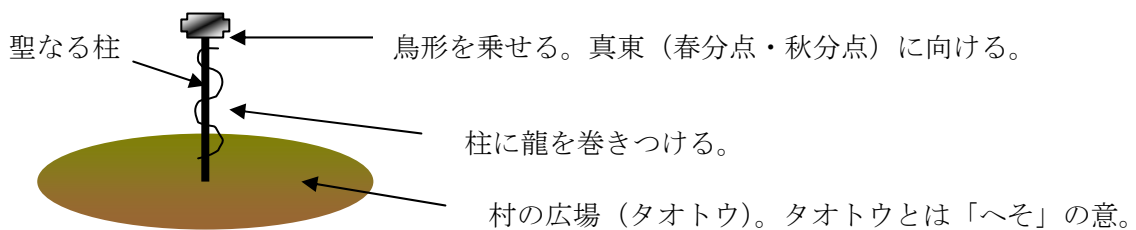
ここで「ソツテ」とは湧く、高い所、松の高い枝、の意で、「テ」は竹、神竿(竹または松)を意味します。東夷伝にも「蘇塗」という語句が見えますが、あるいは同じものかも知れません。

さて、このソツテですが木の先端(一番上方)に木製の鳥形(鴨などの水鳥)を乗せることが多いそうです。似たようなケースはシベリヤやモンゴルでも見られ、その場合は鷲などの猛鳥が乗せられているそうです。ここでも祭祀の中で、鳥と木(柱)が登場しておりますね。

中国ミャオ族の柱

ミャオ族の村には特別な場所があって、「タオトウ」と呼ばれています。家々はこのタオトウを囲むように立っているの、いわば村の中央広場のような具合です。

ミャオ族の考え方によりますと、大地はへそで呼吸し、柱は大地と天空をつなぐ神霊の通り路です。鳥は真東を向いて太陽を呼び出します。この柱のことを芦笙柱と言いますが、祭では柱を巡って笙笛を吹き、輪になって踊ります。鳥・柱・太陽が、やはりワンセットで登場しています。



法隆寺の玉虫厨子台座絵

須弥山図を描き、太陽の中に三本足のカラス、月の中にウサギとヒキガエルを配しています。これは、もともと中国からの伝来であり、朝鮮半島経由のものです。なお、ご想像いただけると思いますが、こうした図の元になったのは、先述した中国の「十日神話」なのです。

また、日輪の中の三本足カラスといえば、那智権現の八咫鳥(ヤタガラス)を思い出します。神武天皇の東征の際に道案内をしたという存在ですね。これはまさしく神霊に他なりません。ここでは柱は出てきませんが、鳥と太陽とが密接な関係にあることを示しております。

神霊降誕

お正月の門松（松と竹を用いる）や注連飾りは、神がそこに降り立つ「依代」^{よりしろ}以外の何ものでもありません。門松は聖なる柱そのものだし、左義長（どんど焼き）なども柱を立てますね。

ところで、「柱」・「橋」・「箸」はすべて同じ語源から出ているという説があります。柱は天上と地上とを結び、橋は川の向こう側とこちら側とを結び、そして箸は食べ物と人間とを結びます。大きさの大小はあれ、それらはいずれも樹木から作られ、日本人にとって馴染みの深いものです。

とりわけ柱の持つ意味は大きいと思います。柱を立てるところから日本の建築文化は始まったと言っても過言ではありません。柱は、当初は天と地をつなぐものという、日本人の精神上、きわめて重要な意味を持っていたのです。文字通り、柱は精神的な支柱なのです。

鳥居とは何か

以上のように、鳥・柱・神というものが非常に関連の深いものであり、鳥居はまさにその象徴であると言えます。鳥居という名称の由来についても、むべなるかなと思われまます。

鳥居をくぐって中に入るといことは、即ち神域に入るといことすし、逆に鳥居から外へ出るといことは、俗の世界に入る（戻る）といことになるわけす。

従いまして、神社のお祭などで神輿が出る時（それは即ち、神が俗の世界に降り立つこと）は、必ず鳥居をくぐって出て行きます。近道があるからといつて、他の門などからは出ないのです。

余談ながら、小泉首相が「聖域無き構造改革」と宣しておられますが、この場合の聖域とは、果して何を指しているのでしょうか？ ある歴史学者が言われるには、「聖域という言葉を使っている。改革すべきは族議員による俗域の世界であり、聖域などという言葉を使安易に用いては困る。聖域は、人が生きて行く上で、重要且つ必要な場所だ。」とのことでした。

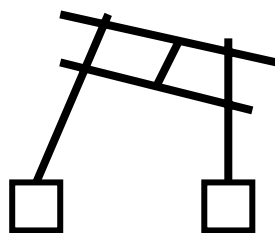
ここまで厳格に考える方は少ないでしょうが、確かに言葉を弄ぶことは避けたいと思います。

～傾く鳥居～ 知恩寺

最後に、世にも稀な鳥居をご紹介します。詳しくは下記アドレスにアクセスしていただきたのですが、私も見た時には驚きました。今までの話が何だったのかと思われるほどです。

www.hi-ho.ne.jp/kyoto/tionji.html

所在地は今出川通東大路（通称 ^{ひゃくまんべん} 百万遍）の交差点から東へ少しです。京都大学の真北です。本当にラフスケッチを描きましたが、何故このような鳥居の姿であるのか、不思議でなりません。



鳥居は何故か右肩下がりで傾いている。
 左上の最も高いところで、高さが2m程度。
 くぐろうとするならば、ともかくも背を丸めて、おじぎするような姿勢でないとくぐれない。